



日本植物病理学会ニュース 第107号

(2024年8月)

【新名誉会員・新永年会員の略歴とお話】

名誉会員 石井 英夫



1948年12月広島県生まれ、1972年3月京都府立大学農学部農学科卒業、1974年3月鳥取大学大学院農学研究科修士課程修了、1975年4月農林省果樹試験場、1996年4月農林水産省農業環境技術研究所、2004年4月筑波大学大学院生命環境科学研究科に勤務。1992年「ナシ黒星病菌のベンゾイミダゾール系殺菌剤耐性に関する研究」により鳥取大学から農学博士を授与。この間、1983年10月から1984年10月までオランダ、ワーゲニンゲン農科大学（科学技術庁長期在外研究員）、1989年9月から1990年9月までイギリス、ブリストル大学、ロングアシュトン試験場（科学技術庁パートギャランティ研究員）、1998年以降、新潟大学大学院自然科学研究科、名古屋大学大学院農学研究科、鳥取大学農学部及び大学院連合農学研究科、宇都宮大学農学部の非常勤講師、ウルグアイ・ラスブルハス試験場短期専門家（JICAプロジェクト）、米国クレムソン大学、タイ国 King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang の招聘研究員を務め、2015年4月吉備国際大学地域創成農学部勤務。2013年農業環境技術研究所名誉研究員、2017年農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）フェロー。2019年筑波大学生命環境系アソシエイト、現在に至る。

学会活動等：庶務幹事、会計幹事、庶務副幹事長、庶務幹事長、評議員、原著編集委員、名誉会員、殺菌剤耐性菌研究会代表幹事、顧問、国際植物病理学会化学防除委員会委員等。

受賞：1983年「ナシ黒星病菌の薬剤耐性に関する研究」により学術奨励賞、2004年「植物病原糸状菌の薬剤耐性に関する研究」により学会賞。

著書：Fungicide Resistance in Plant Pathogens (D. W. Hollomon と共同編集) など。

研究歴：ナシ黒星病菌のベンゾイミダゾール系 (MBC系) 殺菌剤耐性について耐性菌の証明、圃場生態、遺伝様式、生化学的メカニズム、 β -チューブリン遺伝子変異との関係、不相關交差耐性とその遺伝様式、生化学的メカニズム、ステロール脱メチル化阻害剤 (DMI 剤) 耐性とステロール脱メチル化酵素 (CYP51) 遺伝子変異との関係、野菜類うどんこ病菌、ベト病菌、褐斑病菌、灰色かび病菌などの QoI 剤耐性とチトクローム b 遺伝子変異との関係、遺伝子診断、褐斑病菌、灰色かび病菌の SDHI 剤耐性とコハク酸脱水素酵素 (Sdh) 遺伝子変異との関係など様々な病原菌の各種薬剤に対する耐性を研究。また、化学薬剤への依存を減らして耐性菌回避を図りつつ IPM を実現する目的で病害抵抗性に注目し、ナシ在来品種の黒星病抵抗性を見出して育種研究者による新品種育成につなげた。また良食味の黒星病・黒斑病複合抵抗性品種「豊華」ほかを育成農家らと共に研究。併せて将来抵抗性遺伝子が打破される可能性に備えて黒星病菌のレース分化を見出し、その東アジアにおける分布を明らかにした。このほか耐性菌発達リスクが低い病害抵抗性誘導物質としてアシベンゾラル S-メチルのキュウリ、ナシ病害への防除効果とその持続性、作用機構等について研究した。

在外研究の効果：当時耐性菌研究で先端を走っていたワーゲニンゲン農科大学に滞在出来たことは、手法の習得に留まらず、研究システムや自己の研究水準との違いを計る上でも重要であった。日常的に外国人と交流し、初めて海外から日本の社会を眺め得たことは、研究上の困難を克服する経験と共に有益であった。ロングアシュトン試験場では研究予算獲得に忙殺されるホスト研究者の姿に接したが、その後我が国でも国立機関が法人化し、研究が競争的な外部資金に大きく依存することとなった。その際、海外とのネットワークが共同研究の実施やポスドク研究者の招聘、研究情報の入手に大いに役立った。オブザーバーで参

加した FRAG-UK (殺菌剤耐性に関する英国内の組織) からは、その後、我が国で殺菌剤耐性菌研究会を創設する必要性を学ぶことが出来た。オランダからの帰国後、定年退職するまで毎年欠かさず最低1回は海外での学会、シンポジウムに出かけた。自費参加となることも珍しくはなかったが、そのたびに充実した滞在を楽しむことが出来た、退職後は初めてアメリカで研究する機会を得て、サウスカロライナ州立のクレムソン大学で過ごしたが、自身の人生の中でもっとも研究に集中出来た期間だったかも知れない。

期待と要望：就職当初より殺菌剤耐性菌の課題に取り組む、以後ずっとこれを中心に歩んで来た。しかし、耐性菌被害を抑えつつ持続可能な農業を実現する上で重要な代替防除技術の開発は十分ではない。研究成果を海外の有力誌に発表する国内研究者も少なく、我が国の研究に対する国際的な評価は近年低下している。次世代を担う人達には是非とも現状を改善していただきたく、そのためには若いうちから海外研究者のネットワークに入り研究経験も積めるような積極的かつ組織的な取り組みを所属機関や学会に強く求めたい。

謝辞：学生時代より指導を受けた恩師はもちろん、内外の共同研究者、先輩や同僚、そして何よりも研究活動を支えてくださった農家、公設試験研究機関、メーカー、団体の皆様に深く感謝申し上げます。

名誉会員 高橋 賢司



1948年8月兵庫県生まれ、1971年3月神戸大学農学部植物防疫学科卒業、同年4月農林省入省、農業技術研究所勤務。1983年10月から1984年10月まで科学技術庁長期在外研究員として米国コーネル大学に留学、1985年4月中国農業試験場。1989年10月学位論文「活

物寄生菌に対する宿主植物の抵抗性発現に関する電子顕微鏡的研究」により九州大学から農学博士を授与、1992年4月北海道農業試験場研究室長。1997年4月九州農業試験場研究交流科長、2000年5月北海道農業試験場研究部長、2003年4月農研機構研究部長、研究管理監、2009年3月退官、2009年4月日本植物防疫協会技術顧問、2019年8月退職。

学会活動：評議員、学会ニュース編集委員長、北海道部会長、功績者選考委員などを務めた。

研究歴：①農業技術研究所とコーネル大学では、活物寄

生菌の微細構造およびその機能と宿主防御反応との関係について研究した。活物寄生菌にとって重要な吸器の周辺の構造変化及び構造変化に伴う多糖類や分解酵素などの物質の蓄積が宿主抵抗性に密接に関与することを明らかにした。これらの研究成果「純寄生菌の微細構造とその機能に関する研究」によって1981年に本学会の学術奨励賞を受賞した。②中国農業試験場では、重要な土壌病害の一つであるアブラナ科野菜根こぶ病について研究した。根こぶ病菌は活物寄生菌であることから感染源である休眠胞子の土壌中における定量は選択培地が利用できず指標植物による土壌検診が唯一の実用的な方法であった。そこで、蛍光色素染色によって土壌中の休眠胞子数を簡易かつ高精度に定量できる定量法、及び休眠胞子の生死を判別できる活性評価法を開発した。さらに開発したこれらの手法を用い、土壌中の休眠胞子の発芽に及ぼす土壌中各種要因の影響、休眠胞子に対する土壌静菌作用の存在と性質など、根こぶ病菌の生態の一部を明らかにするとともに、休眠胞子に対する各種薬剤の影響解析から薬剤作用機作の一端を明らかにした。③北海道農業試験場では、ジャガイモの重要病害であるそうか病について研究した。そうか病の抵抗性検定の効率化を図るため、ジャガイモ幼苗への噴霧接種による抵抗性実生の選抜や人工汚染土及び萌芽茎への接種による検定などの簡易検定手法を開発した。さらに、ジャガイモ品質に大きく影響するそうか病の病斑型に及ぼす品種等各種要因及び病斑型が剥皮加工性等各種要因に及ぼす影響を解析した。

研究活動、学会活動のなかで多くの方々にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。特に、研究者一年生から懇切なご指導をいただいた梶原敏宏博士、稲葉忠興博士に深く感謝申し上げます。最後に、農業や植物防疫を支える科学である植物病理学を社会に繋ぐ本学会の益々のご発展をお祈りいたします。

永年会員 秋本 正信



1949年兵庫県姫路市生まれ、1971年北海道大学農学部植物寄生病学・樹病学講座(宇井格生教授)卒業、1973年同大学院修士課程修了。同年北海道庁に採用、北海道立林業試験場(現(地独)北海道立総合研究機構林業試験場)に勤務、2009年定年退職まで一貫して同試験場に勤務し、主に樹木病害の調査研究に従事。

入庁後間もなく、当時原因不明で「サクラの奇病」と呼ばれていた病害が細菌病であることを接種試験によって証明し、「こぶ病」と名付けた。本病は「胴枯病」、「てんぐ巢病」とともに、北海道におけるサクラの重要病害の一つになっている。

職場には時に樹木病害の診断依頼があるが、経験の浅い新米職員に診断は容易ではない。ある時、枯死したサクラ苗木が持ち込まれたが、手元にあった「改訂・増補 植物病原菌類解説」と「日本有用植物病名目録」を手掛かりに、ようやく *Camarosporium* 属菌による「苗木がんしゅ病」との診断にこぎつけた。初めての本格的な病害診断だったため、*Camarosporium* 属菌に親しみを感じていたが、その後もしばしば本菌による樹木病害に遭遇することになり、接種試験による病原性の確認なども行った。こうした経緯もあり、「植物病原菌類図説」に *Camarosporium* 属について執筆する機会を得た。

北海道内多雪地の造林地で一時猛威を振るった「トドマツ枝枯病」の研究に携わっていたことから、1988年京都開催のICPPで本病について口頭発表の機会を得た。海外の樹病専門家と交流できたのは楽しい思い出である。

ある時期から自分自身の樹木病害診断技術の向上を強く意識するようになり、身近な樹木病害の発見と記録につとめた。その成果の一部として「日本植物病害大事典(1998)」に樹病15種について執筆した。また、自身の病害診断技術の集大成的な意味を込め、(社)北海道森と緑の会発行ポケット図鑑「北海道 樹木の病気・虫害・獣害(2006)」に183種の樹木病害をすべて病徴写真付きで掲載した。

末筆ながら、この度は永年会員にご推挙いただき心より感謝申し上げます。本学会のますますの発展をお祈りいたします。

永年会員 本蔵 良三



1949年1月広島県竹原市生まれ。1971年東北大学農学部卒業。1973年5～9月東北大学アンデス・アマゾン学術調査隊員。1977年東北大学大学院農学研究科修了(農学博士)。宮城県農政部職員を経て2003年宮城県農業短期大学教授。2006年宮城大学食産業学部教授。2015年退職。(株)渡辺採種場技術顧問。2014年度植物病理学会東北部会長。北日本病害虫研究会名誉会長。主に次の病害の発生生態解明に関

わってきた。イネ：いもち病、ばか苗病、稲こうじ病、縞葉枯病、墨黒穂病、眼斑病(新称)。ムギ類：雪腐黒色小粒菌核病、縞萎縮病。ダイズ・エダマメ：モザイク病、わいか病。ソラマメ：モザイク病、茎腐細菌病(新称)。セリ：葉枯病(新称)、葉腐病(新称)。ノギラン・ニガナさび病。

1978年8月下旬初任地黒川病害虫防除所管内水田で、国内にはもはや存在しないと言われていたイネばか苗病菌完全世代を確認し、現場をくまなく観察するようになった。

1979年いもち病の異常な早期発生があり、冷害でもないので未曾有の大発生に至った経験から、葉いもち広域的初発期の予察技術改善に私も注力することになった。孢子付着後時間と気温による孢子侵入率表(吉野嶺一氏)、新病斑出現日、結露計、気温を毎日見つめること数年後、当時未公開のアメダスデータも併用して大量病斑出現日を約10日前に予測可能となり、現場から頼りにされる発生予察情報を実感できた。

1984年春先、極寒冷地に発生する雪腐黒色小粒菌核病に似たムギ標本が低地転換畑から届いた。例年積雪のない仙台平野低湿地に病原菌は広く分布していて、稀な大雪で転作ムギ被害が顕在化したと想像された。病原菌生活の場として、冬季に水稻の土中葉鞘・稈部位で増殖していることを見つけて(氷河期からの生き残り、松本直幸氏)謎が解決した。

2009年7月学内隔離水田で、とりで1号に葉いもち病斑が1個出現した。隣接の激発ササニシキ葉病斑からのレース変異による伝染が確認され、1個の新レース病斑が葉に発生すれば直ちに蔓延して多数の新レース保菌種が生ずることを足かけ12年間の観察で初めて実証できた。

上記のように現場で発生した種々の課題に取り組むことが多く、周りの方々から惜しめない知識と材料の提供をいただき助けられてきた。皆様に深く感謝申し上げます。現在、野菜育種の現場にいて、植物病理学分野への期待の大きさを実感しています。会員皆さまのご活躍に期待しています。

永年会員 堀江 博道



1949年東京都生まれ。東京教育大学大学院農学研究科修士課程修了。職歴：東京都職員(農業試験場江戸川分場・本場、農林水産部病害虫防除所・病害虫専門技術員、大島園芸技術センター、(財)東京都農林総合研究センター、産業労働局参事)、法政大学生命科学部・同植物医科学センター。受賞・表

彰；本学会学術奨励賞（1981）・学会賞「各種園芸作物病害の診断と生態及び防除に関する研究」（2007），（財）農業技術協会農業技術功労者表彰（2003），樹木医学会功績賞（2017）．本学会での活動：評議員・病名委員・功績者推薦委員など．著作（共著含）：「花と緑の病害図鑑」（2001；全農教），植物医科学叢書 No. 1～9「植物病原菌類の見分け方」「植物医科学実験マニュアル」「樹木医ことはじめ」「植物医科学の世界」「花木・緑化観賞樹木の病害虫診断図鑑」「花壇・緑地草本植物の病害虫診断図鑑」ほか（2014～；大誠社）．

大学では「菌学及植物病理学」という珍しい名称の研究室で，さび病を卒研・修論のテーマとして佐藤昭二先生に師事し，就職年の秋には，当時東京都の喫緊課題であった，緑化樹木の病害診断について，国立林業試験場で小林享夫樹病研究室長にマンツーマンに近い形で3か月間の研修指導をいただきました．職場では一回り上の先輩方に，毎日・毎週のように現地に連れられ，東京農業の実態や農作物の病害診断・薬剤を主とした対策試験等の指導を受け，場内では朝一番で畑を回って農作物の日々の変化や病害虫の発生推移を注視すること，現場職員との交流の大切さなどを学びました．このように在学中や就職初期に，診断・対策の基本技術や人との対応など，現地・現場で学んだ経験は今日まで自分の仕事の軸・支えとなっています．

学生の頃は，「農学栄えて農業減ぶ」と喧伝され，学問・研究に閉じこもることに問題提起がされた時代でした．就職2年目に初参加した，本学会主催の土壤伝染病談話会第7回水戸大会（1974）の3日間の熱気を今でも覚えています．現地検討会・講演発表会・懇親会はもちろん，宿舎でも夜を徹し，大学・国立試験場・民間企業等の参加者が協力関係を築き，すべて仕事・試験研究についての討論でした．このような現地を見据えた解決力が農業現場を深刻な土壌病害から救い，「植物病理学栄えて農業減ぶ」を回避できたのだと心底思います．

都職員として，試験研究・普及行政・島嶼勤務等を通し，規模は小さいながらも，おそらく作目数全国一の農業現場において，病害診断・対策の仕事，さらには研究企画・人材育成に関わられたことは幸せでした．

後年，はからずも大学教員として，植物医科学教育に携わることができました．卒研を伴にした多くの学生が学会発表したり，技術士補や樹木医補の資格を取得し，うち4名は樹木医となり，それぞれ職場・現地で頑張っていることはうれしい限りです．また，縁あって「植物医科学叢書」の創設・編集にも関わることができました．

公設試験場の若い会員の皆さんへ伝えたいことがあります

す…最近は人事異動も頻繁のようですが，普及や行政の仕事には研究に密着したシーズが多数あります．そして何よりも異動ごとに素晴らしいネットワークが築けます．どの職務に進んでも，農業技術職として現場に密着した，的確な診断力と農薬・対処の知識を蓄積していれば，それこそ農家や職場・仲間からも頼りにされるとともに，大学や国研の先生方とも対等にお付き合いができると実感しています．そして，「植物病理学栄えて，植物防疫（診断・対処含む）減ぶ」ことのないよう，みなさんが次代の担い手となることを期待しています．

末筆ながら，ご指導を賜った先生方，上司・先輩方，共同研究者の方々，支えていただいた後輩方，学生・卒業生のみなさんに感謝申し上げますとともに，日本植物病理学会ならびに会員諸氏の益々のご発展を祈念いたします．ありがとうございました．

永年会員 大村 敏博



1948年5月高知県生まれ．

最終学歴：1978年九州大学農学研究科博士課程修了．1978年博士号（農学）（九州大学）．

研究歴：1978年4月農林省植物ウイルス研究所，研究員．1983年12月，農林水産省農業研究センター，研究員．1995年4月，農林水産省農業研究センター，室長．2001年4月独立行政法人農業技術研究機構中央農業総合研究センター，室長．2006年4月，前記センター，チーム長．2009年4月，前記センター，専門員．2013年4月退任．

受賞等：日本植物病理学会奨励賞（1982年）．科学技術長官賞（研究功績者表彰）（1998年）．日本植物病理学会賞（2003年）．

学会活動：日本植物病理学会，庶務幹事，大会運営・プログラム委員．ウイルス分類委員会委員．国際一流誌投稿論文査読．

研究活動：①アジアに発生する主要9種イネウイルスの媒介特性や生化学的性質を解明するとともに，各ウイルスの血清診断法を開発した．②イネに新規な病徴を示し，ヨコバイ類の昆虫によって媒介される新種のウイルスを発見し，イネ・ゴール・ドワーフ・ウイルス（RGDV）と命名した．③ミュータントパネルを用いた解析でイネ萎縮ウイルス（RDV）の感染・増殖をサポートするイネの遺伝子を解明し，*RICE DWARF VIRUS MULTIPLICATION 1 (RIM 1)*

と命名した。④モノクローナル抗体法により、イネ蒟葉枯ウイルス抗体の安価大量生産システムを開発し、本ウイルス病の発生予察に貢献した。⑤二層のタンパク質から構成される RDV 粒子の自律的構造構築機構を原子・分子レベルで明らかにした。⑥RDV の合成工場（パイロプラズマ）や細胞間移行に必要な非構造タンパク質など、複製過程における本ウイルスの 12 種タンパク質の機能と役割を解明した。⑦上記研究成果に基づき、ウイルス複製に重要な役割を果たすタンパク質遺伝子を RNA 干渉の標的として、強度ウイルス抵抗性イネを作出するための手法を確立した。

最先端の知識と技術を農業現場の問題解決に適用する、「農学研究」に全力で取り組むことができたのは、多様な分野の研究者やさまざまな技能を有するスタッフの方々によるサポートの成果です。心より感謝申し上げますとともに、本学会を通じた多様な交流を新基軸として植物病理の分野がますます発展することを祈念しております。

【学会活動状況】

令和 6 年度技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナー報告

令和 6 年度技術士試験対策セミナーは、日本植物病理学会大会会場（仙台国際センター）にて大会第 2 日目（3 月 14 日）の午後、当学会技術士対応委員会主催のもと開催された。対面でのセミナー開催は平成 31 年年度つくば国際会議場以来であった。本セミナーの準備と開催に当たっては、大会委員長をはじめとする大会運営委員会の皆様の特段のご配慮をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げる。

第一部の第一次試験対策セミナーでは、技術士制度と本会の取り組みについて紹介がなされた後、長谷部元宏氏（日本農業株式会社）が技術士制度と第一次試験（農業部門）の概略と受験申込みの手順などについて、ご自身の体験などを交えて説明された。次いで北沢優悟氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）に、第一次試験受験について受験の経緯、勉強法、当日の心得などを具体的に話していただいた。第一部の最後には栢森美如氏（道総研 上川農業試験場）の司会で質疑応答・ディスカッションが行われ、これから受験を目指す方々を中心に活発な議論が行われた。第二部の第二次試験対策セミナーでは、まず栢森氏より第二次試験／試験制度について、筆記試験の書き方のポイントや、受験申込書の業務経歴の記載が口頭試験につながるなどことが説明された。続いて、昨年度の合格者である小河原孝司氏（茨城県農業総合センター園芸研究所）より、受験の動機から、筆記試験に向けた取り組み、口頭試験の様子などの紹介があった。最後に、栢森氏、小河原氏を中

心に質疑応答・ディスカッションが行われた。全体での話し合いが終わった後にも、個別に活発な話し合いが会場の使用時間まで持たれた。第一部、第二部を通し、企業、大学、試験研究機関等から 32 名の参加をいただき、盛況のうちにセミナーを終了した。なお、本セミナーで配布した資料を、これまでに開催したセミナーの資料とともに会員限定で配布している。日本植物病理学会のホームページの「技術士」の項を参照し、お申込みいただきたい。

本セミナーは、オンライン開催を含め通算 11 回目の開催となった。本セミナーを受講した方が技術士試験に合格し、本セミナーで講演いただくといった好循環を今後も続けていきたい。技術士試験合格者は親密にコミュニケーション取り合っており、今後も一体となって受験促進と資格活用に取り組む所存である。末筆となったが、参加者並びに講演者に対し、主催者一同心よりお礼を申し上げる。

（濱本 宏）

第 23 回植物病原菌類談話会開催報告

第 23 回植物病原菌類談話会は、オンライン開催として令和 6 年 6 月 22 日（土）10:00～12:45 にかけて開催し、翌週 6 月 27 日（木）13:00～7 月 1 日（月）13:00 まで「見逃し配信」として参加登録者を対象に同内容を視聴できるようにした。大学、公立の試験研究機関、公益財団法人、種苗会社及び農業メーカーなど、学生・研究者 131 名の参加があった。

今回の談話会は、本橋 慶一氏（東京農業大学）をコーディネーターとした「私にだってできる—新種記載—」をテーマとして講演・質疑応答、総合討論を行った。まず初めに安藤 裕萌氏（森林総合研究所）が「植物病原菌類の新種記載に必要な手続き」と題して、新種記載件数の年次推移の紹介や新種記載の際に命名規約上で必要な条件などを解説した。続いて、山口 薫氏（製品評価技術基盤機構）が「新種記載における分離菌株の重要性と微生物保存機関への寄託の意義」として国内外の微生物保存機関の紹介や NBRC に寄託するうえでの具体的なながれや手続きを紹介した。さらに田留 健介氏（東京農業大学）からは「菌類標本のつくり方・残し方・重要性」として標本を残すことの重要性や標本の作り方、作成において注意すべきポイントなどを説明した。全ての講演が終了した後、総合討論を行い、新種とする際の判断基準、標本作成で困った場合の相談先、種小名をつける際のコツなどが議論された。次回の本談話会は *Diaporthe* 属菌に関する最近の話題をテーマに来春の日本植物病理学会大会に合わせて対面での開催を予定している。

（岐阜大学 須賀晴久）

【今後の学会活動の予定】

1. 2025 年度大会

日時：2025 年 3 月 26～28 日

場所：サンポートホール高松（高松市）

事務局：香川大学

2. 第 5 回日韓合同シンポジウム

日時：2025 年 3 月 25 日

場所：サンポートホール高松（高松市）

3. 部会

(1) 北海道部会

日時：2024 年 10 月 12～13 日

場所：北海道大学（札幌市）

(2) 東北部会

日時：2024 年 9 月 19～20 日

場所：山形大学小白川キャンパス（山形市）

(3) 関東部会

日時：2024 年 9 月 13 日

場所：東京農工大学（府中市）

(4) 関西部会

日時：2024 年 9 月 19～20 日

場所：愛媛大学（松山市）

(5) 九州部会

日時：2024 年 11 月 14～15 日

場所：アバンセ（佐賀市）

4. 談話会・研究会等

(1) 第 58 回植物感染生理談話会

日時：2024 年 9 月 1～3 日

場所：名古屋大学 東山キャンパス（名古屋市）

(2) EBC 研究会ワークショップ 2024

日時：2024 年 9 月 12 日

場所：東京農業大学 厚木キャンパス（厚木市）

(3) 第 18 回植物病害診断教育プログラム

日時：2024 年 9 月 23～27 日

場所：横浜国立大学 常盤台キャンパス（横浜市）

(4) 植物細菌病談話会

日時：2024 年 11 月 20～21 日

場所：文部科学省研究交流センター（つくば市）

(5) 土壌伝染病談話会

日時：2024 年 10 月 17～18 日

場所：文部科学省研究交流センター（つくば市）

【関連学会情報】

ハイブリッド型配信

第 39 回報農会シンポジウム『植物保護ハイビジョン—2024』のご案内

—「みどりの食料システム戦略」に関する植物保護分野の重要課題—

趣 旨：2021 年に農林水産省が策定した「みどりの食料システム戦略」は、地球温暖化、農業の担い手の減少・高齢化、鳥獣害の被害拡大、さらにコロナなど、農業を取り巻く『負の変化』に抗して、広く食料産業・農林水産業の生産力向上と持続性の両立を長・中期的なイノベーションによって実現させようという遠大な計画です。この中には当然植物保護分野も組み込まれており、目的達成には発想の転換とイノベーションが必須です。

今回のシンポジウムでは、「みどりの食料システム戦略」に関する植物保護分野での取り組みの中からカギとなる課題を選び、それぞれのエキスパートに話題提供いただくことになりました。講演内容は、第 1 課題と第 2 課題は地球温暖化に伴う病害虫の動向に関する話題で、第 1 課題は総論、第 2 課題は各論（カンキョグリーンング病の媒介昆虫ミカンキジラミを事例に）です。第 3 課題は農業による環境負荷をいかに軽減できるか、現状から今後の展望までの解説です。第 4 課題は農業環境保全の基礎である生態系保全がいかにあるべきか、農生態学（アグロエコロジー）からの提言です。第 5 課題はイノベティブな害虫防除法（振動の利用）や GAP に取り組む実践農家からの報告です。

5 年ぶりに会場での開催（オンラインとのハイブリッド）となります。多くの皆様のご来場・ご参加を心からお待ちしています。

日 時：令和 6 年 9 月 25 日（水）10:50～15:30（ハイブリッド型開催）

場 所：「北とびあ」つつじホール（東京都北区王子 1-11-1）
JR 京浜東北線王子駅北口より徒歩 2 分、東京メトロ南北線王子駅 5 番出口直結

<プログラム>

開 会：10:50～11:00

挨 拶

報農会理事長 田付貞洋

講 演：11:00～11:45

地球温暖化が病害虫発生に及ぼす影響

農研機構農業環境技術研究部門 山村光司

11:45～12:30

地理情報システム (GIS) を活用した国内におけるミカンキジラミの定着可能地域予測
農研機構果樹茶業研究部門果樹生産研究領域
紺野祥平

12:30～13:15

休憩

13:15～14:00

線虫剤を取り巻く状況 (市場と開発動向について)
アグロカネショウ株式会社 中村元太

14:00～14:45

Agroecology・アグロエコロジーそして農生態学: 有害生物管理における基礎的な話題から
愛媛大学大学院農学研究科 日鷹一雅

14:45～15:30

トマト生産における生産現場での取り組み:
GAP, 振動による害虫防除

株式会社未来菜園 瀬尾 誠

参加費: 3,000 円 (講演要旨集を含む。ただし、講演要旨集のみ購入の場合 2,000 円)

申込み: 報農会ホームページに掲載しております『開催要領』をご覧の上、申込用紙に必要事項を記入して、メール又は FAX でお申し込みください。なお、シンポジウム終了後同じ会場 (同じ URL) で、報農会主催第 39 回功績者表彰式を行います。(15:45～16:15 功績者表彰式、表彰式終了後祝賀会: 参加費 5,000 円)

連絡先: 公益財団法人報農会事務局

TEL/FAX: 03-5980-8773

E-mail: khon0511@car.ocn.ne.jp

URL: <https://honokai.org>

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしくお願い申し上げます。

投稿宛先: 〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ:

門田育生, 佐々木信光, 染谷信孝, 富高保弘

編集後記

学会ニュース第 107 号をお届けします。本号は、今年度ご推挙された名誉会員と永年会員のご紹介、技術士試験対策セミナーと植物病原菌類談話会の開催報告、また今後の学会活動の予定などの記事を掲載しました。

新しく 2 名の方が名誉会員に、4 名の方が永年会員に選ばれました。これまでの学会への多大なご貢献に深く感謝申し上げますとともに、長年にわたる精力的なご活躍に対して心から敬意を表します。

今後の本学会の活動は基本的に対面開催となっており、学会員同士が直接交流する機会が増えていくこととされます。特に今年度は 2017 年以来となる第 5 回日韓シンポジウムが香川での本大会前日に開催されることになっております。皆様には、日韓シンポジウムを含めた学会・部会・研究会等に奮ってご参加いただき、学会活動を盛り上げていただきますようご案内申し上げます。(門田育生)